

D. H. ロレンスとエコクリティシズム

— *Kangaroo*に描かれた 'Landscape' ⁽¹⁾ —

D. H. Lawrence and Literary Ecology

— 'Landscape' in *Kangaroo* —

出水純子

Junko Demizu

Summary

The green prehuman world is the mystery we are chosen to solve. — Edward O. Wilson

Edward O. Wilson is an internationally known American biological theorist and the Pulitzer prize winning author for his works in ecology. He argues that Human Nature and Nature are connected and consistent each other. In his most recent book-*Consilience : The Unity of Knowledge*, a national bestseller, he attempted linkage of science and the humanities. For this reason, his works are read by Literary Ecologist.

Ecology is an crucial issue we are confronted with. Under the global environmental crisis, ecocriticism has become a new approach for literary study. It is the study of the relationship between literature and the physical environment. In 1992, a new Association for the study of Literature and Environment(ASLE) was formed to promote the exchange of ideas and information pertaining to literature that considers the relationship between human beings and the natural world.

The relationship between the cultural and the natural, or 'Man' and 'Nature' had been separated since Descartes' dualism of culture and nature in the 17th century. The English language 'landscape', which had been introduced from Holland, worked as a cultural medium to develop Imperiarism.

OED's definition of 'landscape' is 'A view or prospect of natural inland scenery, such as can be taken in at a glance from one point of view'. This is a man-centered view of nature. Ecologists claim that this definition shows only a portion of nature within the observer's view and regard the term 'landscape' as a

keyword for ecocriticism.

D. H. Lawrence criticized the term 'landscape' as an Ideal Civilization in his novel, *Kangaroo*. He tried to transcend the Descartes' dualism of culture and nature by recovering the subtle inter-relatedness of Man (the cultural beings) and Nature (the natural world).

If Edward O. Wilson is called an 'ecological prophet', D. H. Lawrence could be called an 'ecological prophet' as well.

Keywords

English Literature, Literature and Environment, Ecocriticism, D.H.Lawrence: *Kangaroo*, Edward O. Wilson.

キーワード：英文学、環境・文学、エコクリティシズム、D.H.ロレンス『カンガルー』、
エドワード・O・ウィルソン

目次

- I. はじめに
 1. エコクリティシズムとは
 2. 文学・環境学会
- II. エドワード・O・ウィルソン
 1. 自然 (Nature) と人間の本性 (Human Nature)
 2. 人間と、自然・文化・遺伝子との関係
 3. 詩人の役割
- III. Landscape
 1. 「自然」と「文化」の対立
 2. 概念の産物 (Ideal Civilization) としての 'landscape'
- IV. 『カンガルー』に描かれた 'landscape'
 1. オーストラリアの自然
 2. 詩人の役割
 3. 「自然」と「文化」の対立
 4. 自然 (Nature) と人間の本性 (Human Nature)
 5. 自然と人間の関係性の回復を表わすもの
- V. 結論

I. はじめに

自然描写の豊かなロレンス小説や詩は、エコクリティシズムでしばしば取り上げられている。たとえば、Patrick Murphy 編の *Literature of Nature: An International Sourcebook* では、“Nature in the English Novel” において *Lady Chatterleys Lover*, *The Rainbow*, *Women in Love* が言及され、“The Idea of Nature in English Poetry” においては、詩 ‘Snake’ が20世紀最高の自然詩として称賛されている。また Richard Mabey 編集の、*The Oxford Book of Nature Writing* には、エッセイ ‘Whistling of Birds’ が採録されている。

単行本の批評書としては、アメリカの実践的エコロジストであり、コロラドで山岳研究センター館長を務めている Dolores LaChapelle が、*D.H. Lawrence: Future Primitive* を出版している。LaChapelle は、処女作 *The White Peacock* から晩年の *Apocalypse* まで引用して、ロレンスをディープ・エコロジー (deep ecology)⁽²⁾ の立場から絶賛している。確かにロレンスは、自然と一体となって自然を描くことができた作家であり、グリーンマンの系譜である森番や、自然児のような人物を登場させたり、人間の性を自然のダイナミズムで描いたりしているために、エコロジストの共感を得やすい。そのためにややもすると「文明の敵」であるかのように見なされ、「文化人」としてのロレンスが見過ごされるきらいがある。エコロジーの観点からロレンスを読む場合、この点に留意する必要がある。

本稿では従来からなされて来た、ロレンスの自然への洞察力や、自然描写の巧みさを指摘してエコロジストとしてのロレンスを論じるのではなく、エコクリティシズムのキーワードの一つである ‘landscape’ を取り上げて、エコクリティシズムの立場から小説『カンガルー』を読み直してみたい。結論としては、エコクリティシズムが明らかにしようとしている、自然と文化の二元論的対立の誤謬を、ほぼ一世紀も前にロレンスが指摘していたことが改めて明確になった。人間と自然界との関係性の回復を訴え、自然と文化との対立を越えようとしたことを明らかにしたい。

論の進め方としては、冒頭で引用した “The green prehuman world is the mystery we are chosen to solve.” と述べた、エコロジストであり、文学・環境学会からも注目されている著述家、Edward O. Wilson の「自然」と「文化」論に触れ、次に、デカルトの二元論によって「自然」と「文化」が対立したものとしてみなされたことから、人間の自然界からの分離を招いた ‘landscape’ という、人間の頭脳が作り出した「観念としての自然」(Ideal Nature) を取り上げ、最後に小説『カンガルー』に描かれた ‘landscape’ を分析する。‘landscape’ という言葉が産み出される以前の ‘prehuman world’ の地霊に触れることによって、ロレンスがいかに「自然」と「文化」の対立を越えて、「自然」と「人間」との関係性を回復する鍵を自然界に見出し、我々に提示したかを考察したい。

1. エコクティシズムとは

The green prehuman world is the mystery we are chosen to solve. —Edward O. Wilson

「人間の手が及んでいない緑の世界は、神秘であり、それを解明することが我々人間に託された課題である—エドワード・O・ウイルソン」—この引用は2000年7月23日～29日に米国ニューヨーク州ジョージ湖のほとりで開催された、第14回Children's Literature New England⁽³⁾のプログラムに記されたテーマである。

「緑の文学」「緑の批評」という言葉はまだ日本では聞き慣れないが、現在人類の最大の関心事だといってもよい環境問題（エコロジー）は、文学においても盛んに論議されている。特に米国においてはそうであり、通称「緑の文学」と呼ばれるネイチャーライティングや、「緑の批評」と名づけられたエコクリティシズムは、最新の文学批評としてすでに定着している。その勢いは、上述したように児童文学世界にも及んでいる。というより、子どもの置かれた社会の問題を扱う児童文学の研究には、当然のようにフェミニズム批評、ポストコロニアリズム批評などが入って来て大人の文学批評と境界が引きにくくなっているのが実状である。

エコクリティシズムという言葉はウィリアム・リュカート（William Rueckert）の造語で、1978年に彼のエッセイ“Literature and Ecology: An Experiment in Ecocriticism”で用いたのが最初である。「環境と文学の関連についての批評・研究」を意味する用語で、一般的な文学批評が「書き手とテキストと世界（ここでは人間社会と同義）」の関連を分析するのに対して、エコクリティシズムは、「世界」の概念を「生態圏」（ecosphere）を含むところまで拡大する。エコクリティシズムの批評家であるシェリル・グロットフェルティによれば、この批評分野が関心を示す対象として、たとえば文学における場所の役割、自然のイメージとモチーフ、リージョナリズム、言葉とランドスケープ、女性・自然、エコロジカル・ポエティクス、「ネイチャーライティング」（nature writing）の伝統とその社会的なインパクト、「ディープ・エコロジー」（deep ecology）などが挙げられる。⁽⁴⁾

2. 文学・環境学会

ネバダ大学レノ校のスコット・スロヴィック（Scott Slovic）を初代会長として1992年に「文学・環境学会」（Association for the Study of Literature and Environment）が設立された。通称アズリー（ASLE）と呼ばれるこの学会の使命は、人間と自然界との関係について考え、新たなネイチャーライティングを推進し、環境文学と環境学との相互研究の分

野で、伝統的かつ、革新的学問研究を推進することである。

日本においては、1994年に「文学・環境学会」(ASLE-Japan)が設立された。1998年に学会誌『文学と環境』を創刊するなど活動を拡大している。エコクリティシズムの批評家である伊藤詔子氏によれば、エコクリティシズムは、「時代的には大きな意味でポストモダン批評の一つだともいえる」批評である。エコクリティシズムとポストモダン批評との共通点は、「両者とも伝統的な権威や支配構造—とりわけ西欧文化の柱とされてきた—ChristianityやMarxism等のロゴス中心主義と父権制、単一のイデオロギー支配を批判する」という点である。相違点としては、「ポストモダン批評が、(世界の諸要素からなる)ネットワークをテキスト性つまり意味の関係性としているのに対し、エコクリティシズムは広い意味の土地に全存在がネットしていると考える」。エコクリティシズムは、文化と自然を二項対立のような単純な関係ではなくネットワークと捉えて、両者の相互作用を重視する批評である。⁽⁵⁾

II. エドワード・O・ウィルソンについて

Edward O. Wilson (1929～)は、アラバマ州バーミングハムに生まれた。アラバマ大学で生物学を学び、B.S. とM.S.を取得し、ハーバード大学で生態学のPh.Dを取得した。生態学者、社会生物学者であると同時に、*On Human Nature* (1978年)、*The Ants* (1990年、共著)でピューリッツアー賞を二度も受賞している文筆家でもある。現在はハーバード大学・比較動物学博物館館長を務めている。

ウィルソンは野性動物が示す社会構造の動態(ダイナミクス)、環境との相互作用、そして行動を研究してきた。それはただ単に動物たちの理解にとどまらず、人間の本質、人間行動を理解することでもあるという。冒頭で引用した‘The green prehuman world is the mystery we are chosen to solve’は、「われわれはどこから来たのか、どこへ行くのか、生きているということはどういうことか」という課題を解く鍵は、自然の生態系にあり、それを解くのがわれわれに課せられた課題であるということである。

この点からウィルソンは、「エコロジーの予言者」(ecological prophet)とも呼ばれ、文学・環境学会でも話題に上っている。最新の著書(1998年出版、全米でベストセラー)*Consilience: The Unity of Knowledge*では、「科学、芸術、倫理、宗教を総合した研究」を提唱している。⁽⁶⁾「コンシリエンス」というのはウィルソンの造語で、「科学と人文学の連関」「壮大で、結束した概念、科学、芸術、倫理、宗教を包含した概念」のことである。「我々は、実に、ほんの一握りの自然の法則を理解することで、世界のあらゆることを説明することができるのだ」、「知識を総合することができたら、我々がなにものなのか、なぜ存在するのかが分かるだろう」とウィルソンは言う。

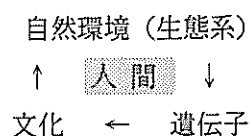
1. 自然 (Nature) と人間の本性 (Human Nature)

ウィルソンは「自然」と「人間の本性」について次のように説明している。

著書『生き物たちの神秘生活』の中で、「自然 (ネイチャー) と人間の本性 (ネイチャー) は密接に結びついて」いて、「自然であれ、人間の本性であれ、どちらか一方を完全に理解するためには、進化の所産として両方をともに詳しくしらべるしかない」と述べている。「人間の本性は、遺伝的な変化と文化的な変化が結びつくことによって、何百年にもわたってつくりあげられたきた」からであると言う。⁽⁷⁾

2. 人間と、自然・文化・遺伝子との関係

ウィルソンの論⁽⁸⁾を基にして、人間と自然、文化、遺伝子の関係を図示すると次のようになる。



〈図の説明〉

①「自然 (環境)」は「遺伝子」を規定し、「文化」を形成する。

例えば、人間がヘビを恐れるのは、ヘビに対する恐怖が遺伝子に組み込まれているからである。人間が生まれ育った環境が遺伝子を作り、その土地固有の文化をつくる。アステカ神話における羽毛の生えた、明けの明星と宵の明星を司る神であるケツェルコアトルの神話などもヘビへの畏怖の念から産み出されてきたものである。人間と自然は密接な関係にあり、「精神の産物としての文化」は、「外界 (自然)」を象徴的に構成し直して物語りや神話や宗教をつくりながら、豊かになるのだ。⁽⁹⁾

②「文化」は「自然 (環境)」を整備する。

ナショナル・トラスト運動や、自然保護運動などがこれにあたる。

上記の図を見ればなぜ「人間性」を追求する文学が、「自然 (環境)」を取り上げるのかは一目瞭然である。環境破壊によって「自然界の種の多様性が失われるということ」(ネイチャーの危機)は → 「人間の文化が貧しくなること (人間のネイチャーの危機)」でもあるからである。遺伝子が自然環境に左右されるとすれば、自然破壊や、自然が失われていくことは、人間性の破壊に繋がることにもなるのである。それほど人間は自然界に依存していて、自

然は人間の精神的な感受性に深く関わっているのである。

3. 詩人の役割

人間と文化と自然が密接な関係にある以上、環境保全には文学者の力も必要である。ウィルソンは、極楽鳥と詩人の例を出して次のように言っている。

古くからあるこの応対（極楽鳥と詩人との関係性）の正体は何だろうか。その完全な解答は、自然科学と人文学の言葉を融合させることによってしか得られない。⁽¹⁰⁾

極楽鳥に魅せられる要因となっている遺伝子情報は、文学（詩人）の言葉を借りて初めて総合的に捉えることができる。極楽鳥と人間との関係性がいかなるものかを説明するのは、分析的科学だけでは不十分で、詩人、文学者の言葉こそが必要である、ということだ。

「精神は、嫌悪や魅惑といった情動を消化吸収して、文化を豊かにするのだ」、そして「嫌悪や魅惑といった情動」をとらえるのは、分析的科学ではなくて詩人である。後で述べるように、ロレンスが『カンガルー』においてオーストラリアの地霊を描くのに、主人公を詩人として設定したことは、この点で意味を持つ。

ウィルソンの言うように、人間の本性 (Human Nature) の中には自然 (Nature) が含まれていて、古代から人間は自然の営みの中で文化や宗教をつくりだしてきた。しかるに、近代ヨーロッパにおいて、その自然を支配の対象とし、また都会 (city) に対する田舎 (country) と見なすようになって、「自然」と「文化」を対立するものと位置づけた。そこには都市と周辺、帝国と植民地という、産業資本主義、帝国主義という権力のイデオロギーがあった。さらに自然を描いた風景画は「視覚のイデオロギー」として、人間と自然との間に支配、被支配の関係を作り上げていくことになった。レイモンド・ウィリアムズは『田舎と都会』(Country and the City) の中で、「労働者のいる田舎は『風景』『風景画』にはならない」といっている。⁽¹¹⁾ このような歴史的背景から、エコクリティシズムは 'landscape' (「風景」「風景画」) を批評の対象となるキーワードとして、自然をイデオロギーから開放しようとしている。

III. Landscape

'Landscape' という言葉はもともとオランダ語で、オランダで16世紀後半に初めて用いられた。風景画、肖像画が盛んであった17世紀に、イギリスを訪れたルーベンスやヴァン・ダイクを経由して、'landscape' という英語が生まれた。OEDによるとイギリスでの最初の使用は1603年で、定義は、'A picture representing natural inland scenery, as

distinguished from a sea picture, a portrait, etc.’ (内陸の自然風景を描く絵画。海の絵や肖像画と区別して使われる)。1725年からは現在とほぼ同じ、次の定義となった。‘A view or prospect of natural inland scenery, such as can be taken in at a glance from one point of view; a piece of country scenery’. (ある視点から一瞥して見ることができる内陸の自然の景観。ある地域の景観の一部)。エコクリテシズムが批判しているのは、現在の定義の方である。

ネイティブ・アメリカン出身でありNature Writingの作家である、シルコー (Leslie Marmon Silko) は、エッセイ「風景、歴史、そしてプエブロ的想像力」の中で、‘landscape’ を次のように説明する。

Pueblo potters, the creators of petroglyphs and oral narratives, never conceived of removing themselves from the earth and sky. So long as the human consciousness remains within the hills, canons, cliffs, and the plants, clouds, and sky, the term landscape, as it has entered the English language, is misleading. “A portion of territory the eye can comprehend in a single view” does not correctly describe the relationship between the human being and his or her surroundings.⁽¹²⁾

(下線部筆者)

シルコーは、プエブロの人々がそうであるように、人間の意識が丘や峡谷や大地、空とともにあるかぎり、「〈風景〉(landscape)という言葉は誤解を招きやすい」と言う。人間の目でとらえることのできる土地という意味の‘landscape’の定義は「人間とその環境の関係を正しく表わしていない」として英語として定着した自然の風景を表わす‘landscape’に言及して、ヨーロッパ近代の自然観に対する批判をしている。風景という語が表わす自然は、ヨーロッパ近代の「分離されることを選択した自然観」⁽¹³⁾であり、神話や物語を紡ぎ出す自然を否定する自然観であったのである。

1. 「自然」と「文化」の対立—二元論と「風景画」「風景庭園」の誕生

ヨーロッパで生まれた哲学体系であるデカルト (1596-1659) の「二元論」によって「自然」と「文化」が対立した。デカルトは、人間の目は受動的なレンズであることを発見した。物を見る知性と、物を見る目を区別した結果として、見つめられる客体 (object) と、見る主体 (subject) が区別されるようになったのである。

Descartes discovered that the eye was a passive lens, in order to retain an understanding of the accession to knowledge as active he was forced to separate the seeing intellect from the seeing eye. ... it rendered the objects of the gaze separate from the looking subject: 'Having made the eye purely passive, all intellectual activity is reserved to the "I", which, however, is radically separate from the body which houses it'.⁽¹⁴⁾

現代人は、自分の内なる自然を失った。デカルトの「二元論」が「人間」と「自然」を分けてしまったのである。フランスの文化地理学者であるオギュスタン・ベルグは『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』の中で、日本庭園と西洋の庭園を比較しながら、風景 (landscape) の観念の出現とヨーロッパ近代の主体とは、相関関係にあると説明している。⁽¹⁵⁾

風景画という意味でオランダからもたらされた 'landscape' は「風景庭園」や「ピクチャレスク庭園」を作りだした。「風景庭園」 (landscape garden) は、1720年代に始った風景画のような庭園のことである。英国における「囲い込み」 (15世紀末～17世紀半ば、及び18世紀農業改革) という政治状況の中にも、この庭園の出現の動機が見られる。「庭が絵を追いかける時代」⁽¹⁶⁾ であった。政治的な力や貴族のスポーツであった狐狩りなど、富や権力によって、また、トーマス・クックがもたらした観光ブーム (1841年、1855年) などによって、ありのままの自然が、「風景庭園」にされていったのである。

2. 観念の産物 (Ideal Civilization) としての 'Landscape'

'Landscape' についての批評家である Cosgrove によると、「'landscape' は政治的支配力を持つ文化の一部であり、社会の階級制度をつくるのに役立つ概念の一つである」と言う。また、「風景画」については、「風景画はある意味で、視覚のイデオロギーであり、部分的な世界を見る人間の視野を表象しているだけである」例えば、「18世紀半ばのイギリスの Thomas Gainsborough の描いた風景画 *Mr and Mrs Andrews* は、資本家の財産所有関係を描き出している」⁽¹⁷⁾ と説明している。

Gillian Rose は、*Feminism and Geography* において、「風景画は階級関係だけではなく、ジェンダーの問題も含んでいる」と、エコフェミニズム⁽¹⁸⁾ の立場から述べ、風景画の分析を行なっている。

W.J.T. Mitchell の「帝国の風景」 ('Imperial Landscape') は、風景・風景画が文化の媒体として、ヨーロッパ帝国主義の植民地政策の興亡と深く関わっていることを述べている。⁽¹⁹⁾

ロレンスはヨーロッパ視覚文化に対する批判や二元論による主体と客体の分離については「芸術とモラル」「モラルと小説」「セザンヌ論」などで指摘している。例えば、次に引用する「芸術とモラル」(Art and Morality)ではコダックのカメラのレンズのようになってしまった、人間の目と、視覚文化を批判をしている。

The slowly formed habit of seeing just as the photographic camera sees...
He does not, even now, see for himself. He sees what the Kodak has
taught him to see.⁽²⁰⁾

しかし、静止点から客体を見るカメラとしての目は、モダニズムの時代を迎えて変化していく。モダニズムの時代を生きたロレンスは、主体と客体の関係の変化をいち早く絵画で表現したのがセザンヌであったことを「セザンヌ論」で指摘している。セザンヌの印象派、マリネッティに代表される未来派の時代を迎えて、静止点から客体を見る絵画の遠近法とともに「風景画」「風景庭園」は、衰退していくことになるのである。

人間の目が「受動的なレンズ」のようになってしまって失われた、人間と自然との間の有機的な関係性を取り戻すために、ヨーロッパを後にし、ロレンスはまだ未開の地が残っている、英国のかつての植民地オーストラリアを訪れて、人間と自然との関係性の回復の道を探るのである。次に取り上げる小説『カンガルー』でロレンスが用いた、'landscape' というキーワードには、エコクリテシズムが問題とする、上述したような近代ヨーロッパの権力・視覚イデオロギー批判が込められている。

IV. 『カンガルー』に描かれた 'Landscape'

1. オーストラリアの自然

生物学者でエコロジストのエドワード・O・ウィルソンは、環境問題を考える上で、'The green prehuman world is the mystery we are chosen to solve.' と言っているが、ロレンスも、オーストラリアの自然 'the vast, inhabited land' ⁽²¹⁾ にヨーロッパ機械文明の行き詰まりからの脱出の可能性を探ったといえる。ロレンスは彼の分身である主人公のサマーズに、なぜオーストラリアにこなければならなかったのか、小説の導入部でその理由を次のように説明させている。

In Europe, he had made up his mind that everything was done for, played out, finished, and he must go to a new country. (p.18)

ロレンスがオーストラリアにやって来て、『カンガルー』を執筆しだしたのは、1922年5月のことで、第一次世界大戦で破壊された「ヨーロッパではもう何もかも終止符が打たれ、終わってしまった」と感じたからである。だから新しい国に来なければならなかったのである。

2. 詩人の役割—「観念的な自我」と「深奥にある目覚めた意識」

この小説では主人公が詩人であるということが、重要な意味を持っている。なぜならウィルソンがいうように、科学がとらえられない自然の万物と人間の関係性を表現したり、自然から文化（神話、物語など）を紡ぎ出すのは詩人、文学者だからである。ロレンス自身も「モラルと小説」(‘Morality and the Novel’) で、科学は静止した均衡を得ようとして、「法則」で我々をあちこちの木に釘付けしようとしているが、小説は、人間と万物との「微妙な関係」(subtle inter-relatedness) をこの上なく描いてくれると述べている。⁽²²⁾

『カンガルー』ではサマーズに詩人としての資質をはっきりと認識させている。地霊の存在に気づくことができたのは、「サマーズが詩人だから感じ取ることができたのだ」と作者のロレンスは解説する。普通の人なら、自分とは無縁のものだと避ける感情や感覚である。

As a poet, he felt himself entitled to all kinds of emotions and sensations which an ordinary man would have repudiated.(p.18)

詩人であるサマーズは、あらゆる情動を捉えることができる故に、ブッシュの中に ‘presence’ を感じる。しかし、詩人としての使命感から、恐怖を覚えながらも、恐怖を乗り越えて、地霊 (the spirit of place)⁽²³⁾ を感じ取ろうとする。

恐怖を感じたからといって、それは「意識的な魂」⁽²⁴⁾ が恐怖を感じているということではない。この「意識的な魂」こそ、サマーズが決して捨てることのない、人間を特徴づける文化・文明であることを、後で述べるように、ロレンスは、カンガルーを長とするディガークラブのメンバーであるジャズとの会話の中で、サマーズに語らせている。

サマーズは、オーストラリアの自然にヨーロッパ人が持つ「カメラの目」では見えない何かを、自然と自分との間に感じ取る。それは「風景ではない」何かであると言う。

The strange, as it were, *invisible* beauty of Australia, which is undeniably there, but which seems to lurk just beyond the range of our white vision. You feel you can't see — as if your eyes hadn't the vision in them to correspond with the outside landscape. For the landscape is so unimpressive, like

a face with little or no features, a dark face.(p.86)

オーストラリアの不思議な美は、「白人の目には見えない美」(beyond the range of our white vision) であり。オーストラリアの風景は、「風景以外のもの」とは交流できない白人にとっては、あまりにも「希薄」である。「風景以外のもの」(The outside landscape) というのは、本論Ⅲ. Landscapeで引用した、シルコーの言う、英語になったlandscapeの定義 'A portion of territory the eye can comprehend in a single view' ではない何か、つまり「生きている自然」⁽²⁵⁾「ありのままの自然」である。

3. 「自然」と「文化」の対立をもたらした観念的自己からの開放

'landscape' は「自然」と「文化」の対立の中からでてきた概念であるが、『カンガルー』の中でロレンスも、「観念の産物」「機械文明の中での観念的な自我」として 'landscape' をとらえていることが次の引用から分かる。

...he drifted into indifference. The far-off, far-off indifference. ... Leaving behind the body of care. Even the body of desire. Shed. ... The landscape? - he cared not a thing about the landscape. Love? - he was absolved from love, as if by a great pardon. Humanity? - there was none.
...The soft, blue, humanless sky of Australia, the pale, white unwritten atmosphere of Australia. (p.365)

自然と人間の関係性を取り戻すためには、デカルトが、自然と人間を分ける結果を招いた'I'(自我)の放棄をしなければならない。自我を捨てることで、サマーズから'landscape' という固定的な(静的な)観念の産物(the ideals)が消えてしまう。人間の文化が作り出した 'landscape' という言葉にまわりつく観念「人間の気配」(機械文明がもたらしたイデオロギー: 権力、搾取、欲望、消費文化、視覚文化)が無意味になり、一種の解脱体験(indifference)「自我放下」を体験し、無関心の世界(indifference)に入っていく。そこは、ヨーロッパ人が鑑賞の対象とする、観念的な自然である風景など「どうでもよい」世界であった。人間の手の加わらない「まだ白紙状態の」「人間の気配などまるでない」世界である。

サマーズは自我を放棄することによって、自然が確かに人間の本性の一部であることを知り、人間は自然と交感できることを知った。しかしロレンスは、人間と自然が渾然一体となった状態にもどれと言っているのではなく、自己の内なる自然に気づき、自然と人間との関係

性を捉えることによって、はじめて自己を完成し、生命の全体性 (fullness of being) を達成することができると言っているのである。次の項目で述べるように、自然と交感することは、人間が築いてきた「文化」を放棄することではない。

4. 自然 (Nature) と人間の本性 (Human Nature)

ロレンスは自我は捨てよと言っているが、「文明化した真の意識」「人間の奥深いところに存在する自己責任をもった覚醒した意識」は捨ててはいけないと言う。なぜならこれが、自然と人間との関係性を描き、人間性を豊かにし、さらには自然環境をも豊かにするからである。

サマーズはカンガルーことベンジャミン・クーリーの死後、オーストラリアを去る前に、カンガルー率いるディガークラブのメンバーであるジャズに次のように語る。

'I won't give up the flag of our real civilized consciousness. I'll give up the ideals. But not the aware, self-responsible, deep consciousness that we've gained. ...'

'The enemy of civilization? Well, I'm the enemy of this machine civilization and this ideal civilization. But I'm not the enemy of the deep, self-responsible consciousness in man, which is what I mean by civilization. In that sense of civilization I'd fight forever for the flag, and try to carry it on into deeper, darker places. It's an adventure, Jaz, like any other. And when you realize what you're doing, it's perhaps the best adventure. ...' (p.383)

サマーズは「真の文明化した意識 (our real civilized consciousness) の御旗を降ろすつもりはない」「観念の産物は捨てる。だけど、我々が手に入れた人間の内の奥深くに存在し、人間としての責任感を持った意識は捨てない」と言う。彼は「機械文明や、この観念的な文明には反対なのだ」けれども「人間の内の奥深くに存在し、人間としての責任感を持った意識、つまり僕はそれが文明というものだと考えているのだけれど、それに敵対しているのではない」「その文明のためには、その御旗はなんとしても守る」と説明する。

サマーズが捨てたのは、ヨーロッパ文明の観念的な自我であり、カンガルーこと、ベンジャミン・クーリーが彼に求めた精神的 (観念的な) 愛 (humanity) である。それは、先に「風景画」「風景庭園」の歴史で見えてきたように、観念の産物である 'landscape' という言葉に表象されていた (植民地主義・帝国主義・産業資本主義などのイデオロギー、視覚文化、消費文化) などを産み出してきたヨーロッパ機械文明の自我である。

「人間の内の奥深くに存在し、自己責任感を持った目覚めた意識」を捨てたのではない。なぜなら、それによって人間とありのままの、未知の自然 (humanless sky of Australia, unwritten atmosphere) との関係性が捉えられるのだから。

人間 (Human Nature) には、無我 (Nature) と「文明化した真の意識」 (Cultural Nature) がある。そしてこの「文明化した真の意識」が、機械文明の中で近代ヨーロッパ人の「観念的自我」に置き換わってしまったことを、ロレンスは 'landscape' という言葉を使って表現しているのである。さらに自然と文化を持った人間との間の「微妙な関係性」を、「天の川」「虹」で描き、自然と自己との「微妙な関係性」をもって、生を充足している生き物の生態をカツオドリで描いている。

5. 自然と人間の関係性の回復を表わすもの—「天の川」「虹」「カツオドリ」

(1) 「天の川」—人間と宇宙との関係性を「天の川」に見る。

オーストラリアでは夜になると、地球から渡れるほど近くに「天の川」が輝き出す。

As was always the case with him, in this country, the land and the world disappeared as night fell, as if the day had been an illusion, and the sky came bending down. There was the Milky Way, in clouds of star-fume, bending down right in front of him, right down till it seemed as if he would walk on to it, if he kept going. The pale, fummy drift of the Milky Way drooped down and seemed so near, straight in front, that it seemed the obvious road to take. (pp. 153)

夜がやってくると、「星けむりのように天の川が目の前に降りてきて、ずっと歩いて行くと、そのままそこを渡っていけそうな気がする」。「ほの白く、けむったように漂う天の川」は、ロレンスが「モラルと小説」で述べた、自然 (万物) と人間との間の固定できない、流動的な関係性「微妙な関係性」 (subtle inter-relatedness, 'Morality and the Novel') を表わしている。

天の川が輝き出すと、つまり、微妙な関係性が回復されると、「機械仕掛けのようになってしまっている地球」 (mechanical earth) が消え去ってしまったと、次のように書いている。

...one would be in a new way denizen of a new plane, walking by oneself. There would be a real new way to take. And the mechanical earth quite obliterated, sunk out. (p.154)

「天の川」は「地上=文化を持つ人間」と、「夜空=無我の自然」との関係性として描かれている。ロレンスは、機械文明の行き詰まりからの脱出路を、ヨーロッパとは違って、真っ暗なオーストラリア（prehuman world）の夜空に現われる、ぼんやりと、漂う「天の川」に見出していることが分かる。

(2)「虹」—二元論を越えるもの。生き物と宇宙との関係性。

The rainbow was always a symbol to him — a good symbol: of this peace.
A pledge of unbroken faith, between the universe and the innermost.(p.173)

虹はいつもサマーズにとって「平安のシンボル」であった。「宇宙と自分の内面との間に交わされた、決して壊れることのない忠誠心の誓約」であった。

「虹」もまた「天の川」と同様に「地上=文化を持つ人間」と、「空=無我の自然」の関係性を表わすものとして、提示されている。と同時に、虹はつかの間に消えてしまうもの、人間と自然との「微妙な関係性」をも表象している。

(3)「カツオドリ」—「空」と「海」二つの世界をつないで、生命の全体性（fullness of being）を達成する様をカツオドリの生態（prehuman world）に見る。

精神や頭だけの観念的な愛を強要するカンガルーと舌戦をかわした後、サマーズはカツオドリの生態に生命の全体性（fullness of being）を見る。サマーズは、空から舞い下り、海の中で完璧な放物線を完成させること、つまり「空と海の二つの世界」を持って始めて生命の全体性が達成されること、また「空」の表象する「文化」（精神、キリスト教の神）と「海」が表象する「自然」（肉体、暗き神）の二つの世界を結びつける生き方があることを、カツオドリの生態から学んだのである。

Why not break the bond and be single, take a fierce stoop and a swing back, as when a gannet plunges like a white, metallic arrow into the sea, raising a burst of spray, disappearing, completing the downward curve of the parabola in the invisible underwater where it seizes the object of desire, then away, away with success upwards, back flashing into the air and white space? ... Why shouldn't meeting be a stoop as a gannet stoops into the sea, or a hawk, or a kite, in a swift rapacious parabola downwards, to touch at the

lowermost turn of the curve, then up again? (p.154)

「空」と「海」の関係は次のように表わすことができるのではないだろうか。

空 = 「人間の持つ文化性 (cultural nature)」(「文明化した真の自己」)

海 = 「人間の内なる自然 (nature)」(「無我」)

なぜ海面下の世界(海)つまり自然と出会うということがいけないのか。人間は自然と触れ合うことによって、空(精神=自己)と海(肉体=無我)の二つの世界を持つことで、カツオドリがカツオドリとしての生を100%享受しているように、人間が人間らしく生きることができるのに、とロレンスは現代人に訴えているようである。

V. 結論

「人間性」(Human Nature)は「自然」(Nature)と切り離せないものである以上、人間性の回復、‘fullness of being’ (生命の全体性)とは、人間と自然の調和ある「共生」によって得られるものである。そしてこの人間と自然との「共生」こそエコロジーの求めるものでもある。「人間の本性」について考えるということは、われわれが存在する生態系(自然)を見直すことでもあるのだ。

今日人類が直面している環境破壊と、生命の多様性の喪失の危機は、人間にとっては、文化が貧しくなることであり、ひいては、人間の本性に関わる危機でもある。‘Human Nature’ と ‘Nature’ との目に見えない関係性(現代の科学は遺伝子情報でとらえようとしているが、科学だけでは捉えられないものがある)を、ロレンスは言葉(小説)で描こうとした。小説こそが描けるという小説家・詩人としての誇りを持っていた。

エコクリティシズムのキーワードの一つである ‘landscape’ を取り上げて、ロレンスの小説『カンガルー』を分析してみると、イデオロギーを持つ、文化的コードとされた ‘landscape’ として自然を見る観念的自己から解放されて、ロレンスはありのままの自然と向き合い、人間も自然の一部であるということを認識し、自然と人間との関係性を回復すべきだと訴えたことが分かる。さらに、その関係性を表現する文学の果たす役割の重大さを指摘した点で、「人間の本性」を知り、生態系の保全を訴えるには、「自然科学と人文学の言葉を融合させることが必要とされる」と言うウィルソンとの共通点を持っていることも明らかになった。

分析的科学に偏りがちなヨーロッパ機械文明を批判し、小説を通して、自然と人間との関係性の回復を訴えたロレンスもまた、ウィルソンと同様に、「エコロジストの予言者」であったといえるのではないか。

注

- (1) この論文は2000年6月18日に開催された、日本ロレンス協会年次大会のシンポジウム「エコクリティシズムから見るD. H. ロレンス」において、「Landscapeをキーワードとして」という題目で口頭発表したものに加筆したものである。
- (2) 非人間世界の声を聞くことと、現代社会が追求する、環境にとって破壊的な慣習を逆転させることとの繋がりを強調する主張。自然は人間が持っているような道徳と自然権を持っていると論じ、他の生物を人間と対等の立場で接する生態系中心主義、生命中心主義を唱える哲学で、エコクリティシズムの中で最も急進的な主張を展開する。Cf.ハロルド・フロム他、『緑の文学批評—エコクリティシズム』伊藤詔子他訳（松柏社、1998年）pp.38-62.
- (3) Childrens Literature New England (CLNE) は、1987年に米国マサチューセッツ州の法律の下に設立された非営利の教育機関である。子どもの生活には児童文学が必要であることを人々に理解させることを設立目的としている。英米の児童文学作家が理事をつとめており、毎年7月に学会が開催されている。
- (4) 山里勝巳編「ネイチャーライティング・キーワード集」『ユリイカ』1996年3月号（青土社）。
- (5) 伊藤詔子「エコクリティシズム (ecological criticism) とは何か」、『英詩評論』第14号、pp.40-41（中国四国イギリス・ロマン派学会、1998年）。
- (6) Consilience = 'linkage of science and the humanities' 'A grand, coherent conception encompassing the sciences, the arts, ethics and religion.' 'he argues that we can indeed explain everything in the world through an understanding of a handful of natural laws. (www.california.com/rpcman/wilson.htm) When we have unified enough certain knowledge, we will understand who we are and why we are here. (*Consilience-The Unity of Knowledge*, Vintage Books, 1999, p.7)
- (7) エドワード・O・ウイilson『生き物たちの神秘生活』、廣野善幸訳（徳間書店、1999年）、pp. 3 - 4。
- (8) *Ibid.*第7章「生物学的所産としての文化」pp.143-176.
- (9) *Ibid.*第1章「蛇（サーパント）」
- (10) *Ibid.*第8章「極楽鳥—狩獵者にして詩人」pp.175-76.
- (11) W.S.T.Mitchell, 'Imperial Landscape,' *Landscape and Power* (University of Chicago, 1994), p.15. 'Reymond Williams notes that "a working country is hardly ever a landscape,' and John Barrell has shown the way laborers are

- kept in the “dark side” of English landscape to keep their work from spoiling the philosophical contemplation of natural beauty.’
- (12) Leslie Marmon Silko, “Landscape, History, and the Pueblo Imagination,” Cheryll Glotfelty and Harold Fromm (eds), *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology* (University of Georgia Press, 1996), p.265.
- (13) 野田研一氏は、「表象と現存—現代ネイチャーライティングの方法的懐疑」の中でシルコーの「風景」(landscape) 批判について次のように述べている。「シルコーは英語の〈風景〉という言葉の定義への疑義を手がかりにして、ここでいわばヨーロッパ近代の自然観に対する根本的な批評を展開している。〈風景〉という言葉が濫用し肥大化するころによってその自然についての思考を形成してきたヨーロッパ近代は、人文科学、自然科学を問わず、シルコーの指摘するとおり、「対象となる土地」の外側にあること、あるいは分離されることを選択した自然観であったといわねばならない。デカルト的均質空間の非表象性を前提とするその自然観は、つまるところ神話的で表象的な〈物語〉としての自然を否定する思想であったといっていいただろう。」(『ユリイカ』、p.201)
- (14) Gillian Rose, *Feminism and Geography – The Limits of Geographical Knowledge*, (Oxford: Polity Press, 1993), p.88.
- (15) オギュスタン・ベルク『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』篠田勝英訳(講談社、1990年)、p.54。「風景の観念はこうしてルネッサンス期のヨーロッパに現われたのだが、これは近代の主体の出現と相関関係にある。つまり自己とそれを取りまく環境を区別し、その間に距離を設ける主体の出現との相関である。事実一方では、絵画における風景画の発展と、いわゆる線的ないし古典的な遠近法の完成の間に時期の符号が見られ、また他方では、このプロセスと、当時の思想潮流において近代的な主体が徐々に確立されていったプロセスの間に、深い類似関係が感じられるのである。」
- (16) 赤川 裕『英国ガーデン物語—庭園のエコロジー』(研究社、1997年)、p.134.
- (17) Gillian Rose, pp.90-91.
- (18) エコフェミニズム(エコロジカル・フェミニズム)とは、1974年にフランスのフェミニズム研究者フランソワ・デュボアヌによって造られた用語である。エコロジーとジェンダーの関わりをとおして現代文明のあり方を問う方法論である。この理論では、西洋文明において環境破壊は女性の抑圧と平行関係にあり、自然と女性は文化と男性の劣等な対立概念として支配や搾取の対象とみなされてきたのだと定義する。「ネイチャーライティング・キーワード集」、『ユリイカ』、1996年3月号、p.229.
- (19) W.J.T.Mitchell, ‘Imperial Landscape,’ P17. ミッチェルは「風景画」は「沈黙

の言語」であり、文化の媒体、文化的コードであるという。 ‘...landscape as a medium, a vast network of cultural codes, rather than as a specialized genre of painting.’ (p.13) また「風景画」は海外に向かっての植民地化を進めただけではなく、「囲い込み運動」などによって、内なる植民地化をももたらし、国家として、帝国としてのアイデンティティーの象徴となった、と述べている。 ‘Empires move outward in space as a way of moving forward in time; the “prospect” that opens up is not just a spatial scene but a projected future of “development” and exploitation. And this movement is not confined to the external, foreign fields toward which empire directs itself; it is typically accompanied by a renewed interest in the re-presentation of the native land. The Enclosure movement and the accompanying dispossession of the English peasantry are an internal colonization of the home country, its transformation from what Blake called “a green & pleasant land” into a landscape, an emblem of national and imperial identity.’

(20) D.H. Lawrence, ‘Art and Morality,’ *Phoenix* (Harmondsworth: Penguin Books,1987), pp.521-22.

(21) D. H. Lawrence, *Kangaroo* (Harmondsworth: Penguin Books,1976), p.18.
以下小説*Kangaroo*からの引用はページ数のみ記す。

(22) Now here we see the beauty and the great value of the novel. Philosophy, religion, science, they are all of them busy nailing things down, to get a stable equilibrium. Religion, with its nailed-down One God, who says *Thou shalt, Thou shan't*, and hammers home every time; philosophy, with its fixed ideas; science with its “laws”: they, all of them, all the time, want to nail us on to some tree or other.

...The novel is the highest example of subtle inter-relatedness that man has discovered. Everything is true in its own time, place, circumstance, and untrue outside of its own place, time, circumstance. If you try to nail anything down, in the novel, either it kills the novel, or the novel gets up and walks away with the nail. (‘Morality and the Novel,’ *Phoenix*, p.528)

(23) サマーズが恐れを抱きながらも、地霊を感じる場面は次のように描写されている。

...But the horrid thing in the bush! He schemed as to what it would be. It must be the spirit of the place. Something fully evoked tonight, perhaps provoked, by that unnatural West-Australian moon. Provoked by the

moon, the roused spirit of the bush. He felt it was watching, and waiting. Following with certainty, just behind his back. ...It was biding its time with a terrible ageless watchfulness, waiting for a far-off end, watching the myriad intruding white men. (*Kangaroo*, p.19)

- (24) ウィルソンは、ヘビに対する恐怖を克服して、文化を作り出す人間についてこう説明する。「5歳以下の子はヘビに対して、特別な不安を感じないが、年とともに蛇を忌避する傾向は強まる。ただし逆方向に向けることもできる。ヘビに順応するには、特別の努力を要するし、たいていは、多少強制的で自覚的でなければならない。」(『生き物たちの神秘生活』p.33)

「われわれは、幼年時代の初期に「嫌悪」の感情を獲得すると、その「嫌悪」を成長とともに増大させる強い傾向を遺伝的に受け継いでいる。これは、系統発生上われわれにもっとも近いチンパンジーも同じだ。だから、そうした感情は、これこそ人間であるという特徴を示すものではない。精神が人間固有の特徴を付け加えるのは、いわば、そのあとのことである。精神はそうした情動を消化吸収して、文化を豊かにするのだ。突然夢に現われるヘビの傾向、曲がりくねった形、そしてその力と神秘が自然の素材となって、神話や宗教が形作られるのである。」(『生き物たちの神秘生活』p.36-37)

- (25) サマーズがシダの生い茂る原始の世界に戻って行って、無我になり、‘sex’ がまるで木の ‘sex’ のように闇に沈潜し、無頓着になるような気がした、という描写があるように、詩人であるサマーズは、生きている自然としての木と交感できる力をもって描かれている。

...And when the old, old influence of the fern-world comes over a man, how can he care? He breathes the fern seed and drifts back, becomes darkly half vegetable, devoid of preoccupations. Even the never-slumbering urge of sex sinks down into something darker, more monotonous, incapable of caring: like sex in trees. ‘The dark world before conscious responsibility was born’. (*Kangaroo*, p.198)

参考文献

Glotfelty, Cheryll & Fromm, Harold (eds). *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology*, Athens: Univ. of Georgia Press, 1996.

Lawrence, D. H. *Kangaroo*. Harmondsworth : Penguin Books, 1976.

—————. *Phoenix*. Harmondsworth : Penguin Books, 1978.

- 邦訳 『不死鳥 下』 吉村宏一ほか訳、山口書店、1986年。
- Mitchell, W.J.T. 'Imperial Landscape,' W.J.T. Mitchell (ed), *Landscape and Power*, Chicago : Univ. of Chicago Press, 1994.
- 邦訳「帝国の風景」永富久美 訳、富山太佳夫 編『文学の境界線』（現代批評のプラクティスー4）、研究社、1996年。
- Rose, Gillian, *Feminism and Geography -The Limits of Geographical Knowledge*, Oxford : Polity Press, 1993.
- Wilson, Edward, O., *Consilience—The Unity of Knowledge*, New York : Vintage Books, 1999.
- ウィリアムス、テリー・テンペスト、『デザート・クアルテットー風景のエロティシズム』
木下 卓、結城 正美 訳、松柏社、1996年。
- ウィルソン、エドワード・O. 『生き物たちの神秘生活』 廣野喜幸 訳、徳間書店、1999年。
- . 『人間の本性について』 岸 由二 訳、ちくま学芸文庫、1997年。
- . 『ナチュラリスト 上、下』 荒木正純 訳、法政大学出版、1996年。
- ベルク、オギュスタン。『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』 篠田勝英 訳、講談社新書、1990年。
- ロレンス、D.H. 『象徴の意味 —「アメリカ文学古典の研究」異稿』 海野厚志 訳、慶応義塾大学法学研究会、1972年。
- スロヴィック、S. 野田 研一 編 『アメリカ文学の〈自然〉を読む』 ミネルヴァ書房、1996年。
- 赤川 裕 『英国ガーデン物語—庭園のエコロジー』 研究社、1997年。
- 野田 研一 「表象と現存—現代ネイチャーライティングの方法的懐疑」『ユリイカ』 増頁特集ネイチャーライティング、1996年3月号。
- 山形 和美 編『差異と同一化 ポストコロニアル文学論』 研究社、1997年。
- インターネット <http://www.up.edu/academics/commencement97/honorary-wilson.html>
<http://faraday.clas.virginia.edu/~djp2n/asle.html> (ASLE's Home Page)

